WS 号外

芸術文化創造センター市民ワーキング フィールドワーク かわら版

《作成・発行》
小田原市
文化部文化政策課
芸術文化創造係

平成 25 年 10 月 19 日

第１回 フィールドワーク「地域に生きる劇場」in 小田原市民会館

7 月 6 日、小田原市民会館 第 7 会議室にて、フィールドワークの一環として、可児市文化創造センターの館長兼劇場総監督である衛 紀生（えいきせい）氏をお迎えし、地域の文化施設・ホールの役割についてお話いただく「第 1 回文化セミナー 地域に生きる劇場」が行われました。市民ワーキングメンバー、その他一般参加者 42 名が参加しました。当日の様子や、皆さまから示されたご意見・ご感想をご紹介します。

～ 衛 紀生氏によるお話 ～

- 可児市文化創造センターala はまちづくりの拠点として市民生活の質の向上へ貢献したとして、地域創造大賞 総務大臣賞（H22）を受賞した。
- 大都市圏はスターなどによる一過の集客を求める、瞬間最大風速重視で"蜘蛛の巣型経営"である。この特殊なエリアと地方は同じやり方では成り立たない。社会貢献による劇場のブランド化と継続的なお客をつくる創客を重視した"**蜜蜂型経営**"を行うべき。
- 社会貢献型劇場経営として、一部の愛好家のための施設ではなく、全市民を対象とした、普通の人々のためになくてはならない。個人の want（やりたいこと）いう発想ではなく、社会の needs に応える。
- 「**まち元気プロジェクト**」は、教育、福祉、医療、多文化などと連携し、アウトリーチや市民参加事業を行い、文化で地域の問題解決に取り組んでいる。
- ala のミッションは"変化"Make a change 新しい価値観の創出。
- 劇場は市民に生きる意欲を与え健全なコミュニティを形成するために、地域社会へ投資するための機関である。

参加者の感想より ※アンケートより

- 目からウロコが落ちる思い。完全に蜘蛛の巣型でしか考えていなかった。蜜蜂型を目指したいと思う。
- 管理運営について非常に細かい点まで熟知されており、文化を創り存続させていくことは現実の非常に細かいことに積み重ねということが良く理解できた。
- 運営側の厳しい責任感がベースに必要と思った。
- 「文化への投資」という発想を忘れて久しい小田原人にとって、新鮮で刺激的なお話だった。
- 文化政策とは何か、ホールの活動はどうあるべきか、などについて根元的に正しく理解できた。
- 文化行政は教育的要素が強いと感じました。
- 文化とコミュニケーションをこのように明確に結びつけてお話をいただいたのは目からウロコの様でした。

第2回 フィールドワーク「あつぎ舞台アカデミー稽古見学」in 厚木市文化会館

8 月 26 日、厚木市文化会館にて「平成 25 年度 厚木シアタープロジェクト あつぎ舞台アカデミー」稽古見学のフィールドワークが行われました。厚木市出身の演出家である横内謙介氏をはじめとする劇団扉座の指導により子どもたちが、歌、ダンス、演技を学ぶあつぎ舞台アカデミーの発表公演に向けた稽古を見学しました。市民ワーキングメンバー10 名、市の職員 4 名、井上委員、計 15 名が参加しました。当日の様子や、皆さまから示されたご意見・ご感想をご紹介します。

～ 厚木市文化会館スタッフのお話 ～

- 厚木市文化会館の芸術監督である横内謙介氏（演出家）は、厚木高校出身で高校生から文化会館と関わっており、そのつながりが現在の活動につながっている。
- 横内氏の主宰する劇団扉座、文化会館、市民による応援団が一体となって厚木シアタープロジェクトを開始。
- 稽古や公演サポート、広報、チケット販促など幅広くサポートしてくれるト市民応援団は、事業を継続するために重要な存在となっている。
- あつぎ舞台アカデミーはオーディションによって選ばれた小学 4 年生から中学 2 年生までの 38 名が横内氏をはじめとする劇団扉座の俳優やスタッフの指導で演技、ダンス、歌を学んでいる。
- アカデミーは通年で開催しているが、夏休みに入り 8 月末の公演に向けて毎日のように稽古がある。スタジオやリハーサル室などの稽古場がないので、地下1階の展示室を 1 ヶ月押さえて、床に舞台と同じ広さのバミリをして稽古を行っている。
- 公演数日前に演出、脚本が変更となり、必死に練習しているところ。

参加者の感想より ※ワーキング時の発表より

- 直前に脚本が変更されたということで、作り上げるのに大変だったと思う。
- 子どもたちのやる気、元気、情熱で取り組んでいる姿に元気づけられた。たくさんの可能性を秘めた子どもたちに学びの場を多く提供したいと思う。
- きちんと先を見据えた企画、良き協力者を見出す力、実績の積み重ねがあって良い作品が作り出されるのだと思った。
- 1 回目から観ているが、年を重ねるごとに子どもたちがプロっぽくなってきた。
- 発表会、おさらい会でなくて、プロを含めて価値のあるパフォーマンスを積み重ねることにより文化レベルをあげて行く。その為にはきちんとした評価が必要。

第3回 フィールドワーク「劇場ってどんなところ？」in 小田原市民会館

9 月 14 日、小田原市民会館 大ホール舞台上にて、「劇場ってどんなところ？～劇場・ホールの成り立ち」の講義のフィールドワークが行われました。間瀬芸術文化担当課長によるレクチャーと、市民会館の舞台を担当する東京舞台照明に舞台機構を操作していただき、実際に見学しながらレクチャーをしていただきました。市民 13 名が参加しました。当日の様子や、皆さまから示されたご意見・ご感想をご紹介します。

～間瀬芸術文化担当課長によるレクチャー

- 劇場の成り立ちとして、古代ギリシャ劇場の構造から、オペラ劇場へ、さらに日本の歌舞伎・能舞台の変遷についての説明。
- 音響重視のコンサートホール、演出的な舞台機構のプロセニアム劇場など事業によって劇場の構造が異なる。
- 劇場の基本的な構造を知るために、劇場を縦に割ってみると…？
奈落とフライタワーがあり、見える部分の3倍以上の容積がある。
- 公共劇場、専門劇場、民間劇場など設置目的によって劇場の構造・運営方針も変わる。

～東京舞台照明によるステージ見学＆レクチャー

- 吊り物機構を学ぶために、綱元の操作、バトンの昇降、緞帳を 2 種類下ろして、表側と裏側から見学した。
- 音響効果を学ぶために、モニタースピーカーを舞台上に置く意味や音の違いを知り、音響操作卓を見学した。
- 照明効果を学ぶために、照明バトンの位置と効果、ホリゾント幕の色を変えてもらい見学した。

参加者の感想より ※アンケートより

- 大変参考になった。古い設備を苦労して使われているのかが良くわかった。新ホールになる時、新しい設備で効果的かつスタッフが仕事しやすいようになるといいですね。
- スタッフが働きやすいことが良い作品を作ること、良いアーティストが来ることにつながると思う。
- 市民会館が単に耐久性上の問題でなく、照明、音響、防音、空調など技術の大きな進歩に対して、それらを導入できていないという大きな問題をかかえていることがよく理解できた。
- 現在に至るまでのルーツを知ることができたことは、今後鑑賞したり演じる側に立ったりする。場に応じた見方が変わってくると思う。色々な点で理解できた。